第1章　は　じ　め　に

1　遺跡の立地と歴史的環境

本調査地点は標高約68m，京都盆地の東北にある北白川扇状地の末端に位置する(第1図1・2)。北白川扇状地は比叡山塊の西南麓に形成された複合扇状地の1つであり，白川がその谷口に黒雲母花崗岩の風化物，いわゆる白川砂を堆積したものである〔藤岡78〕。旧白川と推定できる河道が京都大学北部構内で検出されているが，その下刻は氷河時代に遡り〔泉78，池田・石田73〕，その後，何度も流路を変えて，銀閣寺の北方付近から吉田山と黒谷山の東南部を南流する現在の流路となる〔藤岡78〕。

大正12(1923)年に浜田耕作が，京都大学農学部構内で縄文土器・石器を発見し発掘調査を行なった(第1図3)〔梅原23，島田24〕。これは京都府南部で最初に発掘された縄文時代の遺跡であり，農学部遺跡と呼ばれた。昭和9(1934)年には梅原末治が北白川小倉町遺跡を発掘調査し，近畿地方における縄文土器編年の基準となる資料が出土している(第1図22)〔梅原35〕。昭和47(1972)年以後に行なわれた一連の京都大学構内遺跡の調査でも，縄文前期から弥生前期に至る多くの遺物と遺構が発見されている(第1図4～20)。

北白川扇状地の京都大学北部構内を中心とする地域では，弥生前期末もしくは中期初頭に厚い黄砂層の堆積が始まるが，その層中には遺物を含まない。黄砂層の上には古墳時代後期以後，近・現代に至るまでの遺跡が各所に存在する[(1)]。

本調査地点の北東には北白川廃寺があり，奈良前期から平安中期までの瓦を出土している(第1図25・26)〔梅原39，浪貝・梶川編76〕。北白川廃寺の寺域については明らかではないが，京都大学北部構内では小量であるが奈良型式の瓦と土器が出土していることから〔京大埋文年報77〕，寺域が本調査地点付近に及んでいた可能性も考える必要があろう。他方，角田文衛は京都大学農学部グラウンド南付近で採集された巴文軒丸瓦については北白川廃寺との関係を否定している〔角田70〕。また京都大学工学部建築学教室と湯川記念館(第1図21)付近で平安初期の瓦が発見され，『京都坊目誌』にも京都大学本部構内東北部で礎石と古瓦が出土したとの記事がある[(2)]ことから，杉山信三は同地を吉田寺(神楽岡吉田寺)に比定している〔杉山54〕。かつて北白川追分町の京都大学農学部前の京都市電停留所では，軌道を作る時に多くの石仏と五輪塔が出土したことがあるが，杉山信三は『小右記』永祚元(989)年9月26日条の「吉田卒堵婆供養所」，『権記』長保3(1001)年6月20日条の「吉田

社北三丁内有葬之処」の記事と結びつけ，この地が無常所として古くより葬所・墓地等に使われていたことを推定している〔杉山54〕。この五輪塔には弘治(1555～1558年)と天正(1573～1592年)の銘をもつものがあるという。川上貢もまた同停留所の北に後二條天皇陵が所在することと(第1図27)吉田葬送所とが無関係ではないと指摘している〔川上77〕。

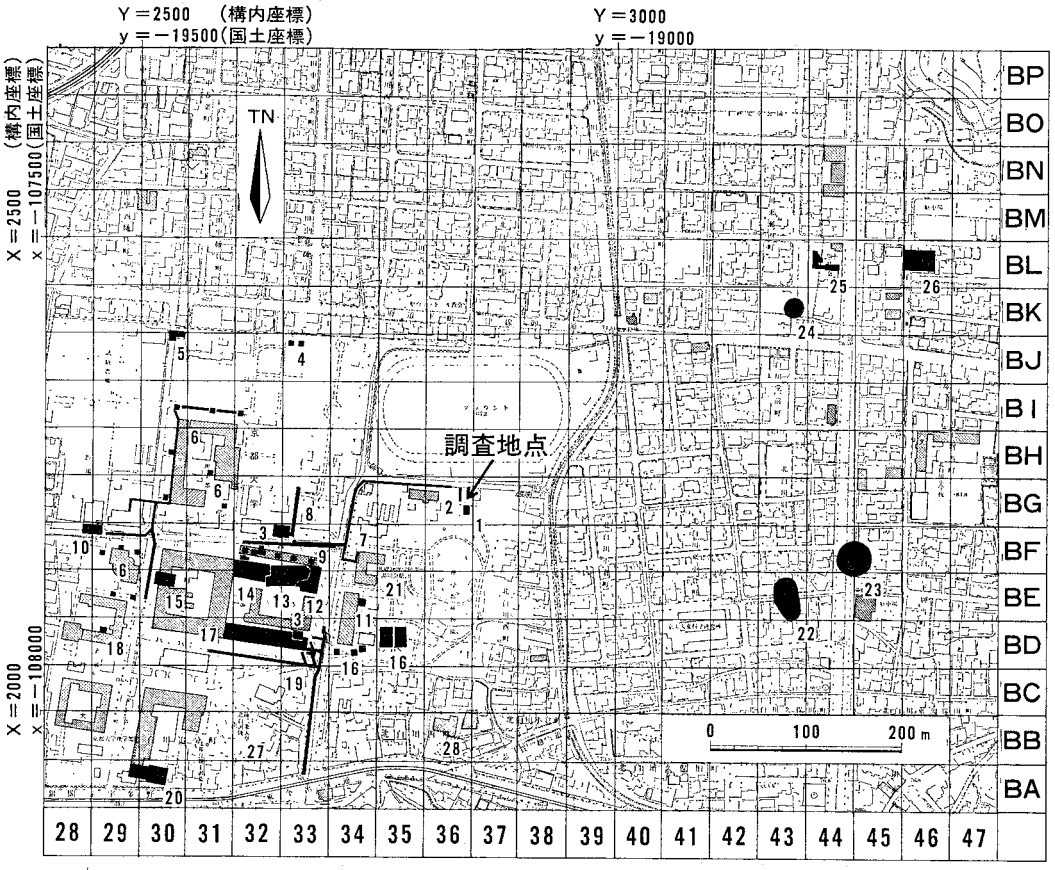
元禄9(1696)年京都絵図[3]によると，現在の京都大学本部構内の東北隅から西南隅へ抜ける白川道の北側に，新長谷寺と新龍寺の名がみえる(第2図)。同絵図には「吉田村之同し，新長谷寺くわんをん，山カケ中納言建立，卅三所之内」「同新龍寺，卜部かね倶コンリウシ，カウ法師二ノ寺ニアリ」の記述があり，山カケ中納言は藤原山蔭〔天長元(824)～仁和4(888)年〕。卜部かね倶は卜部兼倶〔永享7(1435)～永正8(1511)年〕と推定できる。この由緒の真偽は別として江戸時代にもこの地が寺域として利用されていたことを推測できる。『山州名跡誌』にも新長谷寺の名があり，神楽岡の西にあったと記されている。『山州名跡誌』には別に，後二條天皇陵の東にかつて正法寺があり，その由来は不明であるが現在でも瓦石が出土するとの記事がある。また明治5(1872)年5月11日に作成された『山城国愛宕郡第5区白川村現今地形一村限山林耕地全図』や明治44(1911)年発行の『愛宕郡村志』所収の「白川村志」にも現在の京都大学農学部グラウンド付近に正法寺の字名がみえる。京都大学北部構内の東に隣接する北白川西町には「正往寺町，明治廿一年十一月修造」の文字がある石柱がある(第1図28)。この石柱の横には，かつて小川が流れていたといい，同地が公園となったため付近に在住する羽館易氏がこれを保管している。

寺院以外の記録としては『山州名跡誌』で北白河殿を後二條天皇陵付近にあてているが，杉山信三はその位置を北白川久保田町の北方に比定している〔杉山57〕。北白川殿は後高倉院〔治承3(1179)～貞応2(1223)年〕の妃の北白河院陳子の御所として造立され、子の安嘉門院邦子〔承元3(1209)～弘安6(1283)年〕にうけつがれていたものである〔川上77〕。

以上のように本調査地点周辺には縄文時代から近世・近代に至る多くの遺跡が存在し，特に奈良前期以後は文献資料や断片的な遺物から，いくつかの寺院が盛衰を繰り返したことが予想されていた。

2　調査に至る経過

昭和46年以来，京都大学北部構内では農学部校舎群の全面改築工事が実施されていた。この過程で次々と遺物が出土していたが，京都大学は工事に際して事前の発掘調査を実施しなかった。これは，ひとつには大学事務当局の文化財保護法の未承知と行政当局の指導が及ばなかったことによるが，他方学史的に著名な農学部遺跡の範囲を充分に把えられな



第1図　調査地点と周辺の遺跡　縮尺1/8000
(京都市都市計画局発行1/2500市街図使用，承認番号 都企第46号)

かったことにもよる。こうした事態に対して，文化財を保護し学術的な立場から遺跡を究明することが必要とされていた。

京都大学の付属施設の工事に伴なう調査の端緒は，昭和47年8月の安満遺跡の調査にある。大阪府高槻市安満遺跡にある農学部附属農場内に職員宿舎を建築するため，京都大学は文学部考古学研究室を母体とする京都大学安満遺跡調査団を編成し 調査にあたった〔小野山・都出73〕。

昭和47年10月，京都大学北部構内の理学部正門内東側で同学部事務棟の建設工事が開始された(第1図20)。同棟工事は地下1階建で，掘削が地表下3mに至る予定であった。地表下約1.5m に及んで縄文土器および弥生土器が発見され，工事を一時停止させての事前調査を実施することとなった。予備調査は調査主体を理学部とし，同学部の池田次郎教授

と石田志朗助教授が行なった。この結果，地表下1～1.5mに縄文・弥生土器の包含層を確認した。このため，同学部は文学部考古学研究室の小林行雄講師(当時)に専門的立場からの指導を依頼し，実質的な調査体制がとられた。吉田キャンパス内で建物等の工事前に発掘調査を実施する方式は，この理学部事務棟予定地で初めてとられた措置であった。

理学部事務棟の調査が約1カ月で完了した直後の昭和47年11月，農学部ガラス温室の新営工事が計画されていた(第1図1・2)。農学部グラウンドの南側に接する実験農園内である。先に述べたとおり，この地は北白川廃寺に近接し，平安初期の瓦が出土した湯川記念館の東方にあたる。また角田文衛が平安後期の瓦が出土したと推定している地点でもある。当時はまだ「周知の遺跡」として登録された地点ではなかったが，遺跡が埋没している可能性が高く，事前調査が必要であることを小林講師は強調した。ガラス温室の工事着工が遅れていて年度内の竣工が危ぶまれていたが，急拠緊急調査を行なうこととし，小林講師を中心に文学部考古学研究室の大学院生がこれにあたった。

この調査を含め昭和47年度に北部構内の各所において行なった発掘調査〔京大埋文年報78第3表〕が，京都大学構内における遺跡の調査と保護の体制づくりおよび遺跡の実体を明らかにする第1歩であった。

3　調査の経過と以後の措置

調査地点　京都市左京区北白川西町京都大学農学部ガラス温室予定地（京大農学部遺跡BG36区）

発掘期間　昭和47年11月8日～14日，昭和48年3月1日～5日

調査主体　施設部(企画課)

調査指導　文学部講師　小林行雄

調査員　文学部大学院博士課程2年(考古学専攻)　中村徹也
文学部大学院修士課程1年(考古学専攻)　中村友博
(職名は当時のものを用い，大学名を省略した。)

昭和47年11月8日ガラス温室の設置位置に東西1.4m，南北2.7mの長方形の発掘区を設定し調査を開始する(第1図1)[4]。地表下約0.8mで発掘区南半部に瓦片が多数出土。瓦片出土面はほぼ平坦で瓦類は人頭大の礫と混在している。瓦と礫の堆積は厚く，暗褐色砂質土(第5図第7層)を切る大きな土壙の中におさまる。この段階で瓦溜であると判断して発掘を停止した。

続いて発掘区の西壁と北壁の層位図を作成。この時点で瓦の出土した場所を遺構と判断

第2図　元禄9年京都絵図(吉田武尊氏提供)

すると同時に，施設部企画課および農学部関係者と調査指導にあたった小林講師との間で、ガラス温室計画の手直しについての緊急協議を行ない，ガラス温室の位置を南北方向から東西方向へ90度向きを変えることを確認する。

こうして瓦溜は地下に埋め戻し、将来の学術発掘に期すため，これを現状保存するに至った。発掘調査は雨で中断しながら，全７日間を費し11月14日完了した。

またガラス温室の建築に際しては，別の遺構の有無を確認するために小林講師が立合調査を行なった。

ガラス温室が完成したのち，この温室に接続する埋設管の工事があり，昭和48年３月１日から同５日にかけて，前回の発掘区の北側を調査した(第１図２)。その結果，ガラス温室予定地と層位がほぼ対応することを確認したが，遺物は少量で遺構も検出できなかった。

〔注〕

(1)　本報告書を作成中に行なった調査では黄砂層を切る遺構から弥生中期の土器が出土した。

(2)　京都大学構内遺跡と関係する文献からの研究を紹介し，現時点での成果をまとめたものとして川上貢の論考〔川上77〕がある。本章と合わせて参照されたい。

(3)　吉田武尊氏に提供していただいた。

(4)　遺跡の位置と標高を示す基準杭が失なわれているため，位置は現在の建物との関係，標高は現在の地表高から復原した。